様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３３９０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７３０５１６

研究課題名（和文）言語コミュニケーションによる先入観の共有過程の解明

研究課題名（英文）Investigation of shared maintenance process of prejudices through linguistic communication

研究代表者
児玉　さやか（菅さやか）（KODAMA (SUGA), SAYAKA）

愛知学院大学・教養部・講師

研究者番号：３０５８４４０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：特定の集団の人々に対する先入観が、文化・社会で広く共有され、それが差別に繋がることがある。本研究は、人々の間で先入観が共有的に維持される過程を明らかにするため、調査と実験を実施した。調査では、日本社会で差別・偏見の対象となっている集団とその集団に対する先入観の内容を明らかにした。また実験研究では、先入観が共有されているという主観的認識が、ステレオタイプに一致する情報の伝達を促進することを示し、先入観の共有的維持過程を示すモデルを提唱した。このモデルは、特定の集団に対する差別・偏見の低減に応用可能な知見をもたらしたといえる。

研究成果の概要（英文）：Prejudices against particular groups are widely shared in a culture, which is likely to lead to discrimination of those groups. The present study conducted a survey and an experiment to demonstrate the processes that people share regarding prejudices from person to person. The survey revealed which social groups are at risk of discrimination and what kind of prejudices are widely shared in Japan. The results of the experiment demonstrate that a subjectively perceived consensus promotes communication of stereotype-consistent information. These results offer a model showing the shared maintenance process of prejudices. The model can be applied in the reduction of discrimination directed towards the particular groups.

研究分野：社会心理学

キーワード：差別　偏見　ステレオタイプ　言語コミュニケーション　文化

１．研究開始当初の背景

「A 型は神経質だ」あるいは「中国人はずる賢い」などのように、特定の集団の人々に対する先入観は、文化・社会に広く蔓延し、差別や偏見、対人葛藤をはじめとした様々な社会問題を引き起こす。本研究代表者は、テレビやインターネットのようなマス・コミュニケーションや、日常会話など、言語コミュニケーションを通した人から人への情報共有が、先入観の社会的な蔓延の原因であると考え、とりわけ言語表現に焦点を当て、その過程を明らかにするための実験的検証を重ねてきた。

菅・唐沢 (2006) では、先入観に一致する行動は集団の安定的な特性で表現され、先入観に一致しない行動は一時的な行為として表現されるという言語期待バイアス (Maass et al., 1995) が、外集団成員の行動を観察した場合にのみ生じることを示した。言語期待バイアスは、個人が持つ既存の先入観を維持しようとする認知傾向の反映であることから、言語期待バイアスが外集団に対する先入観の共有・維持に寄与している可能性を示唆したと言える。

また、Karasawa & Suga (2008) では、先入観に関連する情報を受け取る他者の存在を明確に設定することにより、情報を伝達するという意図が言語期待バイアスの生起に及ぼす影響を検証した。その結果、情報の受け手の規模が大きくなった場合に、言語期待バイアスが顕著になることが明らかになった。以上の研究結果から、言語コミュニケーションを通した人から人への情報共有が、先入観の社会的な蔓延の原因である可能性の一端を示唆することができた。

しかしながら、上記の研究では、先入観が複数人のコミュニケーションの連鎖を経て、社会の中でどのように共有されていくかという集合的な過程までは検証できていなかった。差別や偏見などの社会問題の解消を実現するためには、集合的なレベルでの先入観の共有過程を明らかにし、社会的な蔓延を阻止する方略の手がかりを見つける必要があると考え、本研究に着手した。

２．研究の目的

集合的なレベルでの先入観の共有過程を明らかにするために、日本社会において、人々が実際にどのような集団に対し、どのような先入観を共有しているのかを明らかにすることを第一の目的とした。また、3～5 名の実験参加者の間で情報の伝達を求める「連鎖再生法」という実験手法を用い、言語期待バイアスを促進・抑制する可能性のある要因を操作することによって、個人レベルの認知過程はもちろん、先入観が共有される際の言語表現の特徴を集合的なレベルで把握することを第二の目的とした。そして、集合的なレベルでの先入観の共有過程に関するモデル構築を目指した。

３．研究の方法

（１）大規模調査による日本社会に蔓延する先入観の特徴把握　日本社会に生きる人々が、一般的にどのような先入観を共有しているのかを明らかにするため、インターネットを介した大規模調査を実施した。調査では、回答者個人の態度とは別に、「共有されているという主観的な認識」に基づく特定の集団に対する先入観と、回答者自身がどのような集団に対して、どのような先入観を持っているのかについて、自由記述による回答を求めた。

（２）実験研究　個人レベルの認知過程および先入観が共有される際の言語表現の特徴を集合的なレベルで明らかにするために、心理学実験を実施した。

（３）総合考察　本報告書のまとめとして、本研究で得られた知見を総合し、本研究の成果と今後の展望について考察する。

４．研究成果

（１）大規模調査による日本社会に蔓延する先入観の特徴把握

回答者：インターネット調査会社の(株)ネオマーケティングに依頼し、20 歳代～40 歳代の男女 900 名 (各性別 450 名、各年代 300 名) のデータを収集した。その際、回答者の居住地を東京都、愛知県、大阪府に限定し、各居住地から 300 名のデータを収集した。

調査実施期間：2013 年 2 月 1 日～7 日

手続き：「集団へのイメージに関するアンケート」という名目で、調査への回答を募った。はじめに、調査の中で、「差別」や「偏見」に関する質問が出てくることを説明し、回答への同意を求めた。回答に同意した人のみが、インターネット上で調査に参加した。

質問項目：1. 日本社会において、一般の人々は、どのような集団・どのような人々に対して、差別をしたり偏見を持ったりすることがあると思うか (自由記述で 1 つ回答)、2. その集団・人々に対して、一般の人々がどのようなイメージ (ステレオタイプ) を持っていると思うか (自由記述で最大 4 つ回答)、3. その集団に対する一般の人々の態度・意見として、集団の(a)有能さと(b)温かさ (各 2 項目)、(c)社会的地位と(d)競争的関係性 (各 3 項目) に関する評価 (全て 5 件法, Fiske et al., (2002)の Stereotype Content Model に基づく)、4. 回答者自身が、「1」で記述した集団に属しているか (はい、いいえの 2 択)、5. 回答者自身は、どのような集団・どのような人々に対して、差別をしたり偏見を持ったりすることがあるか (自由記述で 1 つ回答)、6. その集団・人々に対して、回答者はどのようなイメージ (ステレオタイプ) を持っているか (自由記述で最大 4 つ回答)、7. その集団に対する回答者の態度・意見として、集団の(a)有能さと(b)温かさ (各 2 項目)、(c)社会的地位と(d)競争的関係性 (各 3 項目) に関する

評価 (全て 5 件法)、8. 回答者自身が、「5」で記述した集団に属しているか (はい、いいえの 2 択)　質問項目 1.～4. と 5.～8.の呈示順は、質問紙のバージョンによって入れ替えられていた。

①主観的に共有された先入観の特徴
分析対象となるデータの選定：外集団に対するステレオタイプのみを扱うため、質問項目 4.において、「はい」と回答したデータを除外した。また、質問項目 1.で、「ない」「分からない」と記述した回答者のデータも除外し、残りの 819 名のデータを分析の対象とした。
差別・偏見の対象としての共有性を認識されている集団の特定とその共有的ステレオタイプの特徴：差別や偏見の対象としての共有性を認識されている集団を特定するために、TinyTextMiner (TTM, 松村・三浦, 2009) を用いて、質問項目 1.で得られたデータの中で、出現件数の多い単語を抽出した。出現件数が多かったのは、「宗教団体(74 件)」、「外国人(39 件)」、「障がい者(28 件)」であった。質問項目 1.で、宗教団体やそれに関連する集団名を挙げた回答者は 219 名であった。次いで外国人 (特定の国の外国人を挙げた回答者を含み 107 名) と、心身の障がい者 (61 名) を挙げた回答者が多かった。回答者が質問項目 2.で挙げた各集団に対する主な共有的ステレオタイプ、および質問項目 3(a)～(d)の平均値は、表 1 の通りであった。宗教団体や外国人に対しては、「怖い」や「危険」といった共有的ステレオタイプが認識されており、有能さと温かさの評価はいずれも低く認識されていた。障がい者については、有能さの評価は低く認識され、温かさの評価はやや高く認識されていた。いずれの集団に対しても、社会的地位の評価は低く、競争的関係性はやや高く認識される傾向があった。

表 1. 差別・偏見の対象としての共有性を認識されている集団とその特徴

	主なステレオタイプ	SCMに基づく評定:M (SD)			
集団	自由記述 (N)	能力	温かさ	地位	競争
宗教団体	怖い (22)	2.45** (0.94)	2.17** (0.96)	2.38** (0.85)	3.09 (1.05)
外国人	怖い (7)	2.46** (0.91)	2.22** (0.86)	2.42** (0.77)	3.40** (0.99)
障がい者	かわいそう (10)	2.52** (0.77)	3.32** (0.80)	2.39** (0.71)	2.85 (0.97)

注：*は理論的中点 3 との *t* 検定の結果を表す。
+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

②客観的に共有された先入観の特徴
分析対象となるデータの選定：①と同様の目的で、質問項目 8.において、「はい」と回答したデータを除外した。また、質問項目 5.で、「ない」「分からない」と記述した回答者のデータも除外し、残りの 852 名のデータを分析の対象とした。
客観的に共有された差別・偏見の対象となる集団の特定とそのステレオタイプの特徴：客観的に共有された差別・偏見の対象となる集団を特定するために、TinyTextMiner (TTM, 松村・三浦, 2009) を用いて、質問項目 5.で得られたデータの中で、出現件数の多い単語を抽出した。出現件数が多かったのは、「宗教団体(80 件)」、「中国人(53 件)」、「暴力団(35 件)」であった。質問項目 5.で、宗教団体やそれに関連する集団名を挙げた回答者は 262 名であった。次いで中国人をはじめとした特定の国の人々や一般的なカテゴリーとしての外国人を挙げた回答者 (124 名) と、暴力団やヤンキーなど下品な人々・マナーの悪い人々を挙げた回答者 (95 名) が多かった。質問項目 6.で得られた各集団に対する主なステレオタイプ、そして質問項目 7(a)～(d)の平均値は、表 2 の通りであった。主観的に共有された先入観の特徴と同様、宗教団体や外国人に対しては、「怖い」や「危険」といったステレオタイプが認識されており、有能さと温かさの評価はいずれも低く認識されていた。暴力団やヤンキーといった人々に対しては、宗教団体や外国人よりもさらに有能さおよび温かさの評価が低くなっていた。

表 2. 客観的に差別・偏見の対象として共有されている集団とその特徴

	主なステレオタイプ	SCMに基づく評定:M (SD)			
集団	自由記述 (N)	能力	温かさ	地位	競争
宗教団体	怖い (25)	2.46** (0.93)	2.29** (0.96)	2.47** (0.83)	2.96 (0.92)
外国人	怖い (7)	2.20** (0.93)	1.90** (0.90)	2.35** (0.90)	3.35** (1.05)
下品な人々	怖い (8)	1.56** (0.78)	1.77** (0.80)	1.78** (0.77)	3.21+ (1.17)

注：*は理論的中点 3 との t 検定の結果を表す。
+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

①の結果から、日本社会において、宗教団体や外国人に対する否定的な差別・偏見と、障がい者に対する慈悲的な差別・偏見が広く共有されていることが明らかになった。しかし、②の分析では、日本社会において人々が個人的に感じている差別・偏見の対象には障がい者が含まれていないことが判明した。すなわち、障がい者に対する差別・偏見は、社会的な規範によって作られた副産物である可能性が示唆された。これらの分析によって、日本社会における差別・偏見の具体的な内容を明らかにすることができた。

（２）実験研究：共有されたステレオタイプの認知が情報伝達に及ぼす影響の検討
外集団に対する特定のステレオタイプが内集団成員によって共有されていることを認識すると、人は、ステレオタイプに不一致な情報に比べて一致する情報を用いて伝達し、内集団成員同士で情報伝達を繰り返すと、ステレオタイプに不一致な情報は伝達から脱落するのに対し、一致する情報は維持される傾向があることが先行研究により明らかにされている (Lyons & Kashima, 2003)。こ

の研究知見から、共有されたステレオタイプの認知が、情報伝達を通したステレオタイプの共有を促進する可能性が示されたといえる。このような効果は、伝達に用いられる情報の種類だけでなく、それを表現する言語表現にも現れる可能性がある。ステレオタイプに不一致な情報に比べ、一致する情報はより抽象度の高い表現で記述されるという言語期待バイアス (Maass et al., 1995) が、情報伝達の連鎖によって促進されるかを検証するため、以下の方法で実験を行った。

方法

参加者：大学生 87 名 (うち女性 27 名, 平均 20.22 歳)

実験計画：2 (共有されたステレオタイプ: 好意的・非好意的) × 2 (ステレオタイプ情報の一致性: 一致・不一致) × 3 (伝達順: 1・2・3)　こちらが用意した刺激文が 3 名の参加者の間で伝達されるようにし、最終的に、共有されたステレオタイプが好意的な条件では 14 組、非好意的な条件では 15 組の伝達が行われた。3 名 1 組のグループを 1 人の参加者のように見立て、ステレオタイプ情報の一致性と伝達順を参加者内要因として分析した。

手続き：参加者の所属する A 大学の学生が近隣の B 大学の学生に対して共有しているステレオタイプの内容を操作するため、A 大学の約 7 割の学生が B 大学の学生に対して好意的または非好意的なイメージを持っているという情報を呈示した。次に、B 大学のある男子学生の一日の行動文を刺激文として呈示し、その内容を次の実験参加者に伝える文章を記述するよう教示した。刺激文は、予備調査をもとに選出したポジティブまたはネガティブな行動文各 7 文から成っていた。共有されたステレオタイプが好意的な条件では、前者が一致、後者が不一致情報となり、非好意的な条件ではその逆となっていた。5 分間刺激文を読んでもらった後に妨害課題をはさみ、伝達文の作成を行ってもらった。なお、伝達順の 1 人目、2 人目の伝達文をパソコンに入力し、印刷したものを 2 人目、3 人目に刺激文として呈示した。最後に、操作チェックのため、A 大学の一般的な学生が B 大学の学生に対してどのような認識を持っていると思うかについて回答を求めた (2 項目・7 件法)。

結果と考察

ステレオタイプ情報の言及数：元の刺激文にあった情報が繰り返し言及された数を参加者ごとに計測した。3 要因の分散分析を行ったところ、共有されたステレオタイプ×ステレオタイプ情報の一致性の交互作用が有意であり (F (1, 27) = 4.85, p = .036)、共有されたステレオタイプが非好意的な条件でのみ、不一致情報 (M = 4.02) より一致情報 (M = 5.02) が多く言及された (表 3)。また、伝達順の主効果が有意で、伝達の連鎖を経るごとに情報数が減少した (F (2, 54) = 29.27, p < .001)。3 要因の交互作用は有意に至らなかった。

表 3. ステレオタイプ情報の言及数の変化

共有ステレオタイプ	ステレオタイプ情報	伝達順 1	伝達順 2	伝達順 3
好意的	一致	5.71	4.86	3.79
	不一致	5.79	5.14	3.71
非好意的	一致	5.87	4.93	4.27
	不一致	4.80	3.60	3.67

伝達内容の言語的抽象度：Semin & Fiedler (1988) および菅・唐沢 (2006) の言語カテゴリー・モデルに沿って伝達文をコーディングし、参加者ごとに平均抽象度を算出した。3 要因の分散分析の結果、共有されたステレオタイプ×ステレオタイプ情報の一致性の交互作用が有意であった (F (1, 26) = 5.01, p = .034) 。下位検定の結果、共有されたステレオタイプが非好意的な条件では、一致情報 (M = 2.02) より不一致情報 (M = 2.30) の方がやや抽象度の高い表現で記述されるという言語期待バイアスとは逆の現象が見られた (表 4)。また、伝達順の主効果 (F (2, 52) = 7.15, p = .002) が有意で、ステレオタイプ情報の一致性×伝達順の交互作用に有意傾向が確認された (F (2, 52) = 2.96, p = .061)。ステレオタイプ一致情報は、伝達順の 3 人目の参加者で抽象度が上昇するのに対し、不一致情報は、2 人目の参加者で抽象度が上昇することが示された。

表 4. 情報の記述に用いられた言語表現の抽象度の変化

共有ステレオタイプ	ステレオタイプ情報	伝達順 1	伝達順 2	伝達順 3
好意的	一致	1.70	2.02	2.14
	不一致	1.42	1.97	1.90
非好意的	一致	1.89	1.88	2.28
	不一致	2.19	2.36	2.36

以上の結果から、外集団に対して非好意的なステレオタイプが共有されている場合には、ステレオタイプに一致する情報が多く言及されるのに対し、言語表現の上では、不一致な情報が高い抽象度で言及されるという結果が得られた。これは相反する結果に見えるが、集合レベルでのステレオタイプ情報の維持に関して、情報の量と質が異なる役割を担っている可能性を示唆したと言える。

（3）総合考察

本研究（1）では、大規模調査によって、日本社会に蔓延する先入観の特徴を明らかにした。調査の結果、宗教団体および外国人に対する差別・偏見は日本社会において多くの人によって共有されているという認識があることが明らかになった。これらの集団に対する差別・偏見は、実際に人々が個人的に認識している差別・偏見とも一致していた。すなわち、宗教団体や外国人に対する差別・

偏見は主観的にも客観的にも日本社会で広く共有されていると言うことができる。

その一方で、障がい者に対する慈悲的な差別・偏見は、日本社会で広く共有されているという主観的な認識はあるものの、客観的なレベルでは必ずしも共有されていないことが示された。（２）の実験研究の結果から、人々は外集団に関する非好意的な態度が他者によって広く共有されているという主観的な認識があると、それに一致する情報をコミュニケーションの中で多く伝えると考えられる。そのため、障がい者の能力の低さを表すような情報などは、コミュニケーションによって人から人へと伝達され、それが障がい者に対する先入観として文化や社会の中で維持されていくという過程が想定される。また、（２）の研究では、非好意的な側面を表す情報が伝達に多く用いられるのに対し、伝達の際に用いられる言語表現自体は、好意的な側面を強調するものになっていることが示された。これは、差別や偏見の対象となっている集団の好意的な側面を社会的に維持しようとするために起こっている現象ではなく、その集団の成員を評価するさいに判断基準の変化が生じているために見られる現象であると考えられる (Shifting standard; Collins, Biernat, & Eidelman, 2009)。すなわち、一般的な人々を判断するさいと異なる基準で判断するため、例えば障がい者であれば、「障がい者のわりに頭が良い」などと表される場合がある。このような表現は、一見障がい者に対して好意的な評価を述べているように見えるが、実際には障がい者の能力の低さを前提として考えていることがわかる表現となっている。

以上の結果を総合し、先入観の共有的維持過程を表すモデルを図 1 に提唱する。これは個人が外集団に対する先入観に関連する情報に接触し、その情報を他者に伝達することによって、人から人へとその先入観が共有される過程を示すものである。（２）の研究結果を踏まえると、個人が外集団に対する先入観に関連する情報に接触したとき、その先入観が文化や社会の中で広く共有されていることを認識しなければ、先入観を維持するような情報伝達は行なわれないと考えられる。この場合、先入観に一致する情報と一致しない情報がほぼ同程度に伝達に用いられ、言語表現としてもどちらかを強調するような表現にはならないことが予測される。その一方で、先入観の共有性が認識されると、それを個人間で維持するような情報伝達が行なわれる可能性がある。ただしこの時、話題の対象となっている外集団の成員に対して、一般的な基準と別の基準を適用した判断が行なわれると、先入観に一致しない好意的な側面をあえて強調する言語表現が用いられることがある。一方、判断基準の変化がない場合には、既存の期待を維持するために先入観に一致する情報はより安定的な表現で伝達され、一致しない情報は一時的な行為を表す表現で伝達されるという言語期待バイアス (Maass et al., 1995) が見られる可能性が高い。情報の受け手は、言語期待バイアスに沿った形の情報を受け取ると、外集団に対する既存の先入観を情報の送り手と共有することになる。また、情報の送り手が、先入観に一致しない側面を強調して情報伝達した場合には、それが判断基準の変化に基づくものであると受け手が気づいた場合には、既存の先入観が維持される可能性が高い。しかしながら、判断基準の変化に基づく言語表現であることに気づかない受け手の場合は、外集団に対する先入観が変容する可能性がある。

集合的なレベルでの先入観の共有を避け、差別や偏見を解消するには、外集団に関する情報を抽象化せず、具体的・一時的な行為として言及する方法が考えられる。この点の検証については、今後の課題とする必要がある。また、先入観の共有性の認識以外にも、先入観を維持するような情報伝達を促進する要因が存在する可能性があるため、この点についてもさらなる検証が必要である。以上のように、今後も先入観の共有的維持過程をより詳細に検証していく必要があるが、本研究の成果は集合レベルでの差別・偏見の解消に向けて重要な示唆をもたらしたといえる。

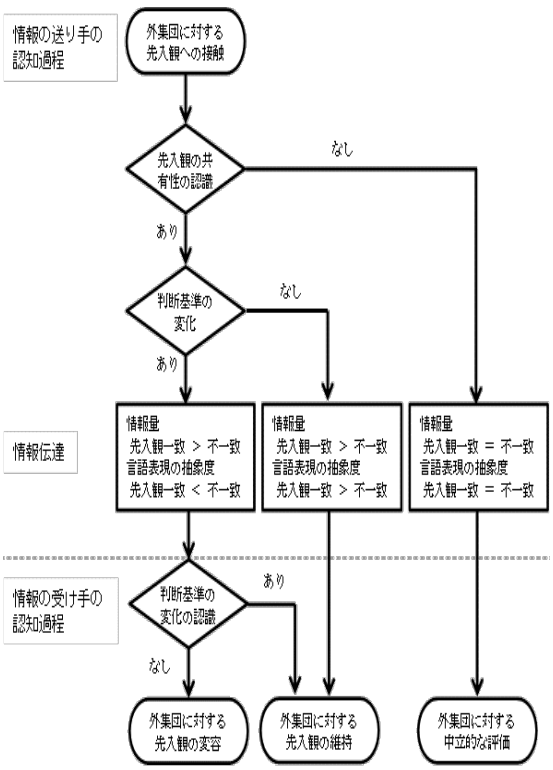

図 1．先入観の共有的維持過程

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計 3 件）

① 菅さやか (2015 年 10 月 31 日). 「共有されたステレオタイプの認知が情報伝達に及ぼす影響」　日本社会心理学会第 56 回大会　東京女子大学

② Suga, S. (2015, February, 26). Comparison between subjectively perceived and objective consensus regarding prejudice in Japan. The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology. Long Beach, USA.

③ 菅さやか (2013 年 11 月 3 日). 「日本社会における共有的ステレオタイプの特徴解明の試み」日本社会心理学会第 54 回大会　沖縄国際大学

〔図書〕（計 3 件）

① 菅さやか (2016). 「情報の伝達と変容」大和田智文・鈴木公啓 (編著) 心理学基礎実験を学ぶ－データ収集からレポート執筆まで pp. 69-76. 北樹出版

② 二宮克美・山本ちか・太幡直也・松岡弥玲・菅さやか (2015). エッセンシャルズ心理学　福村出版 (17-23 章, colum5, 17-23 担当)

③ 菅さやか (2015). 「9. 社会―対人認知と言語コミュニケーション」 北神慎司・林創 (編) 心のしくみを考える－認知心理学研究の深化と広がり pp.107-117. ナカニシヤ出版

６．研究組織

(1)研究代表者

児玉さやか（菅さやか）(KODAMA (SUGA) , SAYAKA)
愛知学院大学・教養部・講師
研究者番号：30584403